

【長崎】「長崎在宅Dr.ネット」人材面は心配なく、世代交代へ-白髭豊・白髭内科医院院長に聞く ◆Vol.2

長崎県で唯一の認定栄養ケア・ステーション開設に尽力

m3.com地域版

2025年6月14～15日に出島メッセ長崎で第7回日本在宅医療連合学会大会が開催される。大会長の片翼を務める、白髭内科医院院長の白髭豊氏は30年にわたり長崎県の在宅医療を担い、長崎在宅Dr.ネットの設立や多職種連携などを通じて地域の医療・介護に貢献してきた。白髭内科医院は長崎で117年の歴史のある診療所であり、白髭豊氏は4代目に当たる。これまでのキャリア選択や医院承継を決めた理由、在宅医療における課題への取り組み、現在の診療状況とともに、第7回日本在宅医療連合学会大会にかける思いを聞いた。（2025年4月10日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら（近日公開）

何かあった時に頼める相手がいるという安心感は絶大

——訪問診療に関わる医師同士がサポートし合うためのネットワーク「長崎在宅Dr.ネット」について、m3.comは以前インタビューさせていただきました（[記事はこちら](#)）。1人の患者に対して主治医・副主治医を決めるとのことでしたが、最初からこの形で運営するつもりでしたか。

いえ、当初は名古屋の診診連携グループを参考に、地域ごとにグループを作って、そのなかで主治医と副主治医を決めようと思って準備していました。しかし、まだ何も決められていない段階で最初の症例依頼が来てしまったので、慌てて主治医を決め、近くの先生を副主治医にすることにしました。つまり偶然の産物として、症例ごとに地域や専門性を加味して手上げ式で主治医、副主治医を決めることになったのです。実際に運用してみると、柔軟性がある仕組みなので、かえって良かったと思っています。

近年では機能強化型の在宅療養支援診療所が増えてきました。長崎在宅Dr.ネットの患者さんに対して、同じグループ内で主治医と副主治医を決めるという形も出てきています。



白髭豊氏

——長崎在宅Dr.ネットの導入によって、先生のご負担は軽くなりましたか。

何かあった時に頼むことができる相手がいるという安心感は絶大です。私が在宅医療に関する講演を年間40～50回行うという忙しい生活を送っていた時期は、副主治医の先生に看取りをお願いすることが何回もありました。現在はあまりお願いしていませんが、負担感を和らげるという意味では大きいです。

——長崎在宅Dr.ネットを立ち上げてから22年が経過しますが、登録者数などの推移はいかがですか。以前、**2019年公開の記事**では減少傾向にあるとのことでした。

長崎在宅Dr.ネットの登録症例数は確かに一時期減りましたが、また盛り返しています。ピーク時の2010年は103例で、2017年には32例まで落ち込んだのですが、その後に回復し、近年は50～80例ほどの横ばいで推移をしています。また、長崎在宅Dr.ネットの医師の正会員は97人前後で安定しており、これは病院医師が訪問診療を行うようになったおかげで維持できていると認識しています。

当時、長崎在宅Dr.ネットを立ち上げたときのメンバーは40代前半でしたが、今は皆60歳を過ぎています。しかし、近年は病院や大規模な診療所に所属するフレッシュな30代のドクターが何人も入ってきてくれていますので、人材面での心配はしていません。これまでに多かった1つの診療所に常勤医が1人という形態は今後減るだろうと思いますし、時代の変遷によってメンバー構成は変わるだろうと思います。世代交代を促すために、私は3～4年前から長崎在宅Dr.ネットの事務局長を降りて、安中正和先生（安中外科・脳神経外科医院）に譲りました。副理事長もそろそろ他の先生に、と思っています。

長崎県で唯一の認定栄養ケア・ステーション開設に尽力

——長崎在宅Dr.ネットのように、白髭先生が在宅医療を行っていく上で課題を感じて、乗り越えてきたことは他にありますか。

食べることは重要です。患者さんの健康を守るためには栄養指導が必要不可欠だと思い、まず自分で何回かやってみたのですが、素養もトレーニングを受けた経験もないことに気づきました。そこで、知り合いに紹介された管理栄養士をパートで雇って栄養指導をしてもらい、せっかくだからと他の診療所とシェアする仕組みを作りました。

その後、長崎在宅Dr.ネットの中でも管理栄養士をシェアするようになり、管理栄養士1人では足りなくなったのでもう1人雇いました。さらに利用が広がり、2人でも間に合わなくなってきたので、長崎県栄養士会に相談しました。当時「栄養ケア・ステーション（※）」という仕組みができ始めたところでした。

当院の裏手にある地域密着型特別養護老人ホーム「みぎわほーむ」内に認定栄養ケア・ステーションを設置し、認定事業が正式にスタートした2018年に認定を受けました。今でも長崎県唯一の認定栄養ケア・ステーションです。栄養ケアの相談窓口としてアウトリーチも含めた対応を行っています。

これまでの実績として、介護食（嚥下食）の料理教室を開催しました。また、2025年3月末から念願のこども食堂をスタートしました。長崎県はこども食堂の普及率が全国でワースト1～2位と低いのです。

（※）栄養ケア・ステーションは、管理栄養士・栄養士が地域住民の日常生活の場で栄養ケアを実施、提供するための地域密着型の拠点。2008年より日本栄養士会が開始し、2018年に認定制度がスタートした。

——栄養指導の必要性を感じても、管理栄養士を雇うところまではいかないと思います。全国的にも先進的な取り組みですね。

しかし、認定栄養ケア・ステーションは介護・医療保険の栄養指導料を独自に算定できません。現状では個別に診療所などから委託してもらい、栄養士を派遣するような形をとる必要があります。栄養ケア・ステーションを発展させたいのであれば、保険請求できるように制度を改革してほしいです。

済生会から購入した土地に特養を設置

——裏手にある特養（みぎわほ一む）は白髭内科医院とどのようなつながりがありますか。

みぎわほ一むは、私が社会福祉法人白之会を立ち上げて2012年に開設しました。もともと当院のすぐ裏手にある800坪の土地に長崎県済生会病院（現・済生会長崎病院）が建っていたのですが、2009年に現在の場所に移転して空き地になってしまいました。当時の院長に売却を持ちかけたところ、医療・福祉に貢献することに使うのであれば800坪まとめて売るとい話になりました。単に後ろにマンションが建つのが嫌だというぐらいの感覚で気軽に話を始めてしまったのが、大きな出費になりました。

みぎわほ一むは入居者定員18人の小さな特養ですし、市内の平坦地にあるので土地の負担が大きくて経営的には厳しいです。でも、後悔はしていません。特養を建てたことで私の活動の幅がぐっと介護の領域へと広がりました。在宅の場に入っていくと、やはり医療と介護はとても近いので、介護について詳細を知ることができたことは、結果的には良かったと思っています。



地域密着型特別養護老人ホーム みぎわほ一む

◆白髭 豊 氏（しらひげ・ゆたか）氏

1988年に東京医科大学医学部を卒業。長崎大学第一内科へ入局後、国立がんセンター中央病院内科を経て、米国チューレーン大学へ留学。帰国後、1995年に白髭内科医院を承継。認定NPO法人 長崎在宅Dr.ネット副理事長、日本在宅医療連合学会理事、全国在宅療養支援医協会代議員、日本プライマリ・ケア連合学会代議員、日本尊厳死協会・ながさき会長。2025年6月14～15日に出島メッセ長崎で行われる第7回日本在宅医療連合学会大会の共同大会長を務める。

【取材・文・撮影＝伝わるメディカル 田中留奈】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

